

もくじ 建部巢兆ほか《合作盃》—足立を越えた交友— … P1
 行政文書に見る足立区の水害記 (十六) … P3 谷文晁《画学齋手本》… P4

足立史談

第 630 号

2020 年 8 月 15 日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



図 1 建部巢兆ほか《合作盃》(題は箱書より)

盃一基 文化二年(1805)

当館蔵 勝村英世氏寄贈

建部巢兆ほか《合作盃》

— 足立を越えた交友 —

加藤 ゆずか

二〇一九年九月十八日(二十一日、あだち拓本研究会主催による「千住の巢兆」展が開催されました。二〇一三年の同会・同会場による「千住の巢兆」展に続くものであり、あだち拓本研究会会員で、現足立文化団体連合会会長である勝村英世氏による、建部巢兆(たけべそうちょう・一七六一〜一八一四 江戸時代後期、千住関屋に秋香庵をかまえ、俳諧・絵画・茶道に力を注いだ文人)に対する長きに渡る研究と作品蒐集、顕彰活動の成果となる会でもありました。

そして昨年、この展覧会の開催の後に、同展に出展した勝村氏の蒐集による巢兆とその交友者の作品が、郷土博物館へ寄贈されることとなりました。郷土博物館ではこの資料群の調査と情報整理を進めており、今回の調査は、ご寄贈をいただいたコレクションの中から特に、巢兆の全国的な交友の実態がわかる一品をご紹介します。

■朱塗盃と箱書き 建部巢兆ほか《合作盃》(図1)は、赤漆の地に、黒漆で菊・小草・バッタが、見込みに簡素な筆致で描かれた朱塗の盃です。

盃の裏(図2)を見ると、まず高台の傍には「文化乙丑仲秋巢兆筆」とあり、これは文化二年(一八〇五)の仲秋(旧暦の八月)に、建部巢兆

が筆を執ったということであらわされています。また、盃の縁付近には「常南加蟲□漆 小艸指峯(□は判読できず)」とあり、これは常南という人物がバッタを描き足し、指峯という人物が小草を描いたということであらわします。

更に本作が収められていた箱の箱書き(図3)を確認すれば、蓋裏には「菊松甫、小艸指峯、虫常南、尚古堂蔵」とあります。次項で後述しますが、巢兆は「松甫」という号も用いていたので、菊の画者は巢兆ということになります。これらの記述によると、本作は、巢兆が菊、指峯が小草、常南がバッタを描いた合作盃であるということがわかります。

■合作の担い手 建部巢兆については、冒頭で簡単に触れましたが、ここで改めてご紹介します。

巢兆は、書家の山本龍齋の子で、加舎白雄(かやしらお・一七三八〜一七九一)に俳諧を学び、夏目成美や鈴木道彦と並ぶ江戸俳諧の三大家と称されました。号は、関屋の里にかまえた庵の名前である秋香庵の他に、黄雀園、菜翁と様々ですが、父龍齋の号、松甫も用いていました。では、巢兆以外の合作の担い手、指峯・常南はどのような人物なのでしょう。

まずは指峯について、本作箱書きの蓋表の内容(図4)を見ますと、



図2 盃裏の添書き

文化しゆん、雲帯、常南と並んで「雲帯」という名前がみえます。これにより、指峯は、信州上田の俳人、成沢雲帯（なるさわうんたい・一七三九〜一八二四）であることがわかります。雲帯は、上田編などを扱う豪商であり、豊かな経済力を背景に、俳諧や奇石集め等に力を注ぎました。俳諧は、巢兆と同じく加舎白雄に学び、指峯楼、槐園という号も有していました。

また常南は、常陸出身の絵師、根本常南（ねもとじょうなん・生年不詳〜一八一二）であると考えられます。常南は、若くして江戸や京都などの諸国巡行を行い、長く滞在した仙台では、絵師で梅描きの名手、菅井梅関（すがいばいかん・一七八四〜一八四四）に、絵の手ほどきをしたことで知られています。文化年間には鎌倉や上州（現群馬県）など関東に訪れており、墓所が群馬県渋川市横堀に残っています。

つまり本盃は、千住、信州上田、そして常陸という、それぞれ遠く離れた三つの地域を拠点とする文人たちによる合作であるとわかるのです。■足立を越えた巢兆の交遊 本盃が制作された文化二年に、巢兆は更科の月を見に信州へ赴いていました。

信州更科の月は、平安時代前期の『古今和歌集』に歌が詠まれるなど、古来より歌詠み人の憧れの対象でした。近世になると、松尾芭蕉（まつおばしろう・一六四四〜一六九四）が、更科の月を見に訪れ、その様子を『更科紀行』（元禄元年〜二年成立・一六八八〜八九）に著してからは、更科は月見の名所として全国に知られるようになりました。巢兆が月を見に更科を訪れたのも、芭蕉への憧憬の念に由来するものと考えられます。

月見といえば仲秋の名月、盃が制作されたのも文化二年の仲秋と盃裏に記載がありますので、巢兆の更科訪問と、盃の制作時期は一致しているといえます。これにより、文化二年の仲秋、巢兆が信州を訪問した際に、信州上田の豪商雲帯と、諸国巡行で関東周辺を旅していた根本常南が出会い、盃に絵を描きあつた様子が推測できるのです。盃裏の添え書きの文字が、巢兆の名前がひときわ大きいことから、おそらく巢兆発案の元で合作が行われたものと考えられます。酒を酌み交わす盃という形であらわされたのも、酒豪の巢兆ならではの遊び心がみとれます。

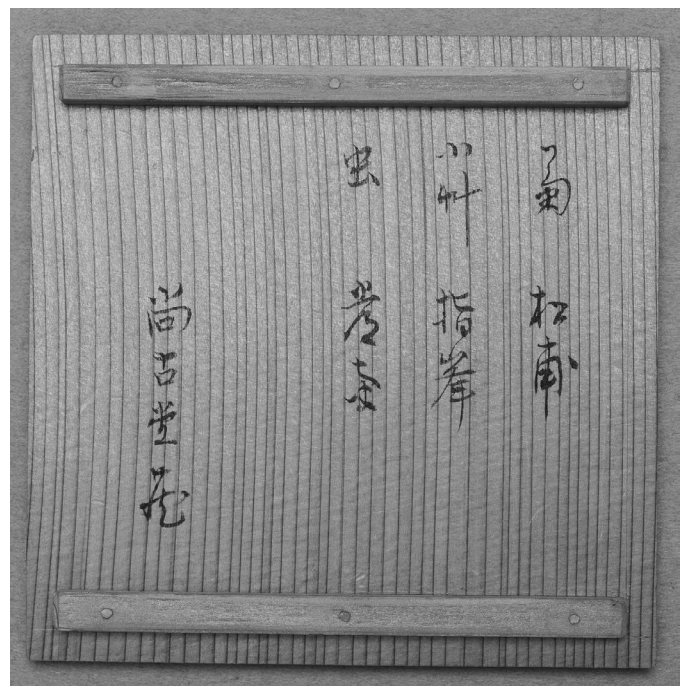


図3 箱書き 蓋裏

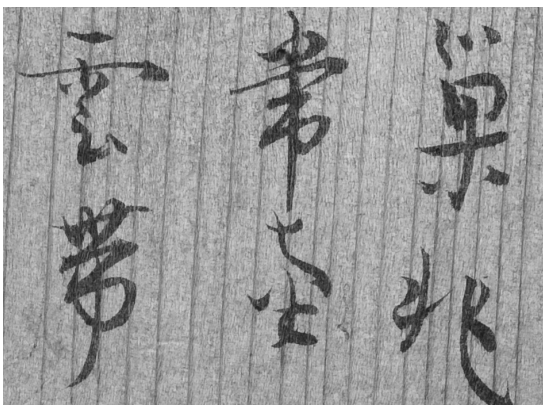


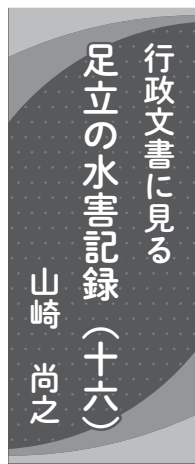
図4 箱書き 蓋表(部分)

本盃は、巢兆の諸国巡行の痕跡を辿ることができると共に、足立を越

えた巢兆の交友の実態をうかがい知ることができません。千住俳壇のトップとして千住連を率いていた巢兆、その交友関係は千住の中だけでなく、信州上田や仙台など全国に波及していました。本盃はその様子の一端がわかる資料と位置づけることもできるのです。

今回ご紹介しました合作盃を含め、勝村英世氏寄贈の作品・資料群は、作品調査・整理を進め、今後郷土博物館のオープンデータベースで公開を予定しています。巢兆とその交友者による、約八十点にも及ぶ豊かな作品群は、建部巢兆の人物・画業双方の輪郭を明らかにしていくことでしょう。

(郷土博物館専門員)



■日誌【十一】(明治四十三年水害)

状況確認のための職員の出張が続きますが、それに次いで多いのが議員の視察です。特に八月十八日は、町村の被害状況や救助状況の記載はまったくなく、視察者の記載に終始し、水害被害などどこかにいってしまっただけのような書きぶりです。

■訪れる議員たち 午前七時には品

川町の書記が来庁しました。十時五分には東瀨江村書記と梅島村長が来庁しました。十一時には千住町長の永野昇太郎が来庁しました。

九時には、日野西侍従(日野西資博、後に子爵 一八七〇〜一九四二)を出迎えるために(北千住駅に)出向しました。

十一時十分には、近衛第二連隊下谷救護隊副官山内武徳が来庁しました。

午前十一時五十分には岡崎邦輔(一八五三〜一九三六 和歌山県出身の衆議院議員。大正十四年に加藤内閣で農相を務める)と森久保作蔵(一八五五〜一九二六 現在の東京都日野市出身。初め自由民権運動に参加し、三多摩自由党壮士として活動。のち東京府会議員を経て、この時は衆議院議員)が、同時に渡辺勤十郎(一八六四〜一九二六 大分県出身の衆議院議員。明治三十八年〜四十年に東京市助役を務める)が来庁しました。午後零時四十分には花畑村長の千ヶ崎源四が救助米のことで来庁しました。

午後一時五十分には東京府会議員の瀧本八十八他十名が来庁しました。

■侍従一行の動向 午後一時三十分には日野西侍従一行が北千住駅に到着し、千住地区を巡察しました。侍従一行の動向は、翌十九日の新聞に掲載されました。その様子を読売新

聞から拾ってみると、

「(前略)午後零時半一等一両二等二両を連結した臨時列車は南千住駅を北千住へ水を蹴って走る。北千住駅前から三艘の船に分乗して避難所たる千寿第一小学校を訪ふ。内野南足立郡長は罹災民に旨を伝へると何れも容を正して聖恩の有難きに感泣せざる者はない。同校現在者は二百五十名で此附近四尺の減水だが十一日俄に水の襲来した時には第九教室では水の圧力の為、根木板が持上って三尺四方の大穴が空いた位である。付近では皆俄の事で家財を取片付けぬ中に水に遇ったと見えて腐った畳や鶏や猫の死体が其辺に散在して臭い事は夥しい。千寿第二小学校から熊谷堤の炊出し場を巡察し、臨時列車で午後三時十分発車、同三十分三河島着(後略)」

とのことです。この日の巡察は、

浅草方面から始まって南千住から北千住へと渡り、そこから三河島・尾久・田端に至るもので、足立には一時間半の滞在という駐足とでもいえるようなものでした。一行の動向は、東京日日新聞や風俗画報にも掲載されました。足立の巡察終了後、午後三時の汽車で一行は北千住駅から三河島駅に出発しました。見送りのた

め郡長は汽車に同乗しました。

午後三時十五分に歩兵第三連隊長歩兵大佐若見虎治(一八六六〜一九三五 長崎県出身。後に陸軍中将)が来庁しました。

午後四時三十分には東京瓦斯株式会社支配人の福島甲子三と水野克讓が来庁しました。

■復旧の進捗 このように視察者が引きも切らず来庁する状況の中、東京日日新聞は千住大橋がこの日に開通したと報じています。

「南北千住両町とも已に其表通は完く退水し目下其跡片付に戦場の如き混雑をなし居れるも、其裏通りは尚ほ浅き処にて一尺深き処にては五六尺に及ぶ浸水なれど十八日午前五時より牛馬及び車を除く外大橋の通行を許され墜落したる新開橋跡は御用船三隻を以て町民交通の便を開き市場も亦開かれたり。」(八月十九日条)

大橋の開通も市場の開業も、東京日日新聞では十八日のこととされていますが、都新聞では十七日のことと報じられています。どちらが正しいのかわかりませんが、郡役所の公的な記録には記されていない現場の様子からすると、着々と復旧は進んでいたようです。

(郷土博物館専門員)



展覧会出展資料紹介

谷文晁 《画学斎手本》

小林優

郷土博物館では、本年七月二十三日から九月六日にかけて、企画展「映像で観る美と知性の宝庫 足立」を開催しています。近年の調査で明らかとなった江戸時代の足立地域における豊かな美術・文芸文化を、紹介映像で学び、現物を見て体感する内容です。今回は、その出展資料紹介として、谷文晁の絵手本《画学斎手本》（ががくさいてほん）を取り上げます。

■深みを増していく地域資料

開館以来、当館では地域の方々からの篤いご協力により、歴史・民俗・文化史にまつわる様々な資料の寄贈を賜り、それが各家、各地域の生活や活動などを調査する上で大きな助けとなってきました。

そういったこれまでの積み重ねの上に、近年の調査成果が重なり、地域の美術・文芸活動を物語る資料として意味合いがより深まった一例が、栗原の旧家、水野家に伝来し、平成十三（二〇〇一）年に郷



図1 《画学斎手本》中の「竹」の図

土博物館へ寄贈された《画学斎手本》です。

■《画学斎手本》の概要 《画学斎手本》は、江戸時代後期に各地の文人たちから絶大な支持を得、「画学齋」の別号を名乗った絵師、谷文晁（たにぶんちやう、一七六三〜一八四一）による簡易な水墨花卉図を収めた卷子です。

卷子の中には、水墨による梅、竹、二図の蘭という四図（図1）が収められており、図数こそ少ないものの、巻末には「文晁筆」の大書の署名と、「画学齋印」の朱文重郭方印が捺され（図2）、文晁の自筆であること

が示されています。

表紙には、文晁と同じく江戸下谷の文人の一人である書家、関根江山（せきねこうざん、生没年不詳）の筆による「畫學齋手本」の題箋（図3）が表題として貼られ、絵を学ぶための絵手本とされていますが、巻末に落款を持つあたりからも、粗略な手習い品ではなく、文晁の画として一定の格式を持つものであったことが窺えます。

■伝来者である水野家 この《画学斎手本》を伝えたのが、現在の足立区栗原にあたる栗原村の旧家、水野家です。

水野家と同家の寄贈資料については、『足立史談』第四〇二号（平成十三年八月刊）所収の桑原功一（現 渋沢資料館副館長・元当館専門員）氏と矢沢幸一郎（現 足立史談会副会長）氏による資料寄贈時の報告記事で述べられています。水野家は栗原村の名主で、寄場組合大惣代などの重職も務めた家で、谷文晁の門下となって画を学んでいたことが明らかになってきている竹の塚の豪農、河内半蔵（かわちはんぞう）の縁戚でもありました。寛永三（一六二六）年に將軍家光が二条城へ行幸した際の行列図を、天保八（一八三七）年に水野家の弥市郎と、河内半蔵が一緒に描き写した《御上洛行列之絵図》（現在は当館蔵）も確認



右：図2 巻末の文晁の落款
左：図3 表紙の題箋

されており、水野家が文晁門下であった河内家を通じて画法の学習を行っていたことを感じさせるのです。

寄贈当時、この《画学斎手本》は、文晁と水野家・河内家ら江戸東郊地域の豪農層との関係をにのせる資料として重要なものでした。しかし、近年の調査の進展で、同じく河内家の縁戚である上沼田村（現 区内江北地域）の豪農、船津家の同時代当主であり、やはり文晁に画法を学んで絵師として活躍した船津文淵（ふなつぶんえん、一八〇六〜五六）の活動が確認されたことで、江戸東郊地域に対する文晁の画法の広まりが、血縁関係を下地としてより広く展開していたことが窺えるようになりました。《画学斎手本》はそのような血縁を軸とする東郊地域における文晁画風の広がりや裏付け得る資料として、一層の意義を持つものとなったのです。

（郷土博物館専門員）